



Title	上代形容詞の連体修飾用法：語幹による修飾と連体形による修飾
Author(s)	林, 浩恵
Citation	語文. 2006, 87, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69078
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上代形容詞の連体修飾用法

— 語幹による修飾と連体形による修飾 —

一 はじめに

形容詞による連体修飾は、語幹によるものと連体形によるものがある。上代において形容詞が活用形を整えていった経緯から、この二つの連体修飾用法は連体形が成立する前後の時期的な相違によるという考え方が可能である。しかし、時代が下ってもなお新たに形容詞語幹による連体修飾用法が見られることを考えると、単純に時期的な問題とも言えない。上代における二つの連体修飾の選択基準を明らかにすることが本稿の目的である。

調査対象文献は万葉集・古事記・日本書紀・続日本紀宣命・祝詞で、仮名書き例の他、訓字表記例も含める。⁽¹⁾ただし、固有名詞、語幹の用法の違例となる例、「[名詞+語幹]+名詞」という形態の例、オホシは対象から除外した。「[名詞+語幹]+名詞」は、「[名詞+語幹]」が主述の関係にありその部分全体で下接の名詞を修飾しているので、単なる「語幹+名詞」とは構造が異なるため

林 浩 恵

である。ただ、その「[名詞+語幹]」が語尾を伴って形容詞として用いられる例がある場合は対象とする。オホシは、蜂矢真郷（一九九二）に上代では「大きい」意の例が連体形オホキの連体法という限定的な用法しか持っていないという指摘があるように、特殊な事情があるため除外した。以下、単に「修飾」と述べる場合は連体修飾を指す。

二 形容詞の意味分類とその基準

本稿では阪倉篤義（一九八五）によって形容詞の意味分類を行い論証を進める。阪倉（一九八五）では、形容詞を状態性・情意性に二分し、さらに状態性を状態と感覚に、情意性を程度・評価、感情にそれぞれ下位分類する。ただ、明確な分類基準が示されていないので、本稿では川端善明（一九八三）に示された形容詞文の構造を参考として分類基準を立てる。川端（一九八三）では形容詞を情態性形容詞と情意性形容詞とに分類し、感覚性形容

詞は情態性形容詞に含まれ、評価性形容詞は情意性形容詞に含まれるとする。そして形容詞文の主語（知覚の対象）に着目し、情態性形容詞文では主語は何らかのもの、（傍点は原文による）であること、情意性形容詞の主語は一種のことがら（傍点は原文による）であるが、情意の主者を常に「私」として意味的、関係的に潜ませることを指摘する。感覚性形容詞と評価性形容詞とはその二つの形容詞の間に位置づけられる。感覚性形容詞は情態性でありながら主語に「私」が立つことができ、評価性形容詞の主語はことがらであるけれども、「私」が主語として文に現象せず、しばしばものの主語をもつことに安定するという。

阪倉（一九八五）・川端（一九八三）を参考に形容詞の意味分類とその基準を示したのが表1で、具体例を次に示した。例文の括弧内は省略可能であることを示す。以下、上位分類の「状態」は「状態性」、下位分類の「状態」は「状態」と記す。

【表1】

情	意	状	態	
(5) 感情	(4) 評価	(3) 程度	(2) 感覚	(1) 状態
感情	評価	程度	感覚	状態
コトガラ	コトガラ (モノ)	コトガラ (モノ)	モノ	モノ
	△(両方有り)	×	○	×
	○			

(1) 空が青い。 *空が晴れることは青い。 *私は空が青い。

- (2) 手が冷たい。 *雨が降ることが冷たい。 私は手が冷たい。
 (3) 雨(が降ること)が甚だしい。 *私は雨が甚だしい。
 (4a) 彼(が遅れたの)が悪い。 *私は彼が悪い。
 (4b) 彼(が懸命に努力するの)が愛しい。 私は彼が愛しい。
 (5) 彼が来たことがうれしい。 *彼は(彼が来たことが)うれしい。

三 上代におけるク活用形容詞の連体修飾用法

三・一 音節数との関わり

上代におけるク活用形容詞（以下、ク活）の連体修飾用法をまとめたのが表2である。数字は用例の延べ語数で、空欄は用例がないことを示す。*は複数の意味を持つため表中でも複数箇所挙げたものに付した（表3、4も同様）。表2から、語幹による連体修飾用法では基本的に二音節以内の語幹が用いられることがわかる。状態性形容詞のク活語幹で三音節以上のものは「接頭辞＋語幹」「語幹＋語幹」「名詞＋ナシ」などの複合語幹や「カ＋i」の派生語幹であるが、それらは連体形による修飾用法が中心である。

三音節語幹で語幹による連体修飾用法があるものはミジカシ、コトナシである。ミジカシは、語幹末がカであることから形容詞語幹相当と考えられた可能性がある。形容動詞語幹「カ」は前述のようにユタカ、ユタケシ、サヤカ、サヤケシのように形容詞化するものがある。ミジカに対して、やや時代は下るがミジ

感 情				評 価						感 覚							
				ヨ						*ヤス (安)	*カラ ウマ	イタ アマ	ワカ				
				1						4		3 2		11	a	語幹による修飾	
															b		
										3	2 13			19	c		
											10		10	2	d		
																計	
				1						7	12 16	2 10		32			
*ヤスキ (安)	ココログキ	*カラキ	イブセキ	*イタキ ヨキ	ヤスキ (易)	タフトキ	サトキ	カヤスキ	カタキ (難)	カシコキ	オモシロキ	ウレタキ	サムキ		*イタキ アマキ	キヤナキ	ワカキ
	1 2		1	1 1	2	1		5 2	1	3		1		2	a	連体形による修飾	
					9			18						2	b		
1	1 2	1	1 5	6 2	4 1	2	9	1	15						c		
				5	3		1 20						1	1	d		
1	1 3	2 2	5 12	3 18	1 1	3 52	2 2	18				1 1	2 3	計			

ケキの例があることが形容動詞語幹相当と考えられた証左となる。形容動詞語幹には連体修飾用法があるので、その類推によってミジカシも語幹の連体修飾用法が見られるのであろう。

(6) ほととぎす来鳴く五月の短夜も〈短夜毛〉ひとりし寝れば

明かしかねつも

(万葉集一〇・一九八一)

(7) 庫齋ミシケキヤ

（觀智院本類聚名義抄 法下一〇二）

一方コトナシの語幹による連体修飾用法の例はコトナグシであるが、これは前述の「[名詞＋語幹]＋名詞」の構造で、他の語幹の用法とは性格が異なるものである。

(8) 須々許理が醸みし御酒に我酔ひにけり事無酒へ許登那具志
笑酒に我酔ひにけり (古事記歌謠四九)

このように連体修飾用法となる語幹は基本的に二音節以内であったが、語幹が修飾する名詞には長音節のものや複合語も見られる。例えば、フルコロモ〈古衣〉(万葉集六・一〇一九)、シロタダムキ〈斯漏多陀牟岐〉(古事記歌謡六一)、タカミクラ〈多可美久良〉(万葉集一八・四〇九八)、フトノリトゴト〈敷刀能里等其等〉(万葉集一七・四〇三二)などである。

これらのことを考えると、上代の「語幹＋名詞」という複合語構成において、被修飾語である名詞を語構成の基本におき、修飾部が長くなりすぎないようにするため、語幹は基本的に二音節以下のものが用いられたと見られる。

三・二 語幹の意味との関わり

三・二・一 状態性語幹

表2を見ると、語幹による連体修飾用法は状態性語幹の場合に多く用いられていることがわかる。中でも色を表す語幹の例が突出して多い。モノはほとんどのものが色を持つため、色名は様々

なモノと結びつく可能性を持ち、それだけ造語力もあると言える⁽⁴⁾。

次に、ク活で語幹による連体修飾用法の例があるものをまとめ
たのが表3で、用例が多く見られるもの（ここでは一〇例以上）
に網掛けを付した。これを見ると、状態性ク活では語幹による連
体修飾用法が多く用いられる傾向にある。それでは、連体形によ
る連体修飾が多く用いられるアカシ（明）・キヨシ・シゲシ・ト
ホシ・ナガシ・サムシはどのように考えるべきであろうか。

アカシは、上代では「赤」「明」の二つの意味が未分化である。
語幹の連体修飾用法では「赤」の意の例が多いが、「明」の意の
例ではアカホシ（明星）（万葉集五・九〇四）とアカトキ（阿加
等伎）（万葉集二〇・四三八四）の二つの複合語の例がある。一
方、連体形による連体修飾用法では全て「明」、それも「澄み切
って汚れない」意となる。「明」は状態であるが、「澄み切っ
て汚れない」では価値判断が付随することが注意される。

（9）：天皇の天の日継と継ぎて来る君の御代御代隠さはぬ明き
心を（安加吉許己呂乎）皇辺に極め尽くして：

（万葉集二〇・四四六五）
キヨシは「清らかだ」の意で、多く自然の美しさに対して用い
られる。

（10）秋風の吹き扱き敷ける花の庭清き月夜に（伎欲伎都久欲仁）
見れど飽かぬかも
（万葉集二〇・四四五三）
アカシ・キヨシは知覚の対象がモノであるため状態に分類してい
る。しかし、アカキと同様にキヨシも意味に価値判断が付随して

【表3】

状 態																							色 彩					
ワカ	ヨワ	*ヤス (安)	ミジカ	ホソ	フル	フカ	ヒロ	ハヤ	ニコ	ナガ	トホ	ト (聡)	チカ	タカ	シゲ	サ (狭)	コトナ	キヨ	カタ (固)	ウマ	アラ	アサ	アカ (明)	シロ	クロ	アヲ	アカ (赤)	
11					1	2	1	2		6	1	1		9			1			5	4	4	7	19	3	16	12	a
																											b	
19			2	1	8		12		4		9	11		28	1			1	1		25	23	23	56	29	29	17	c
2	7	19			13	16		14	1	3	10	17	1	2	29	9				7		1	5	3	17	8	d	
32	7	19	2	1	22	18	13	16	5	3	25	29	2	2	66	1	9	1	1	5	36	27	31	80	35	62	37	計
ワカキ			ミジカキ	ホソキ	フルキ	フカキ	ヒロキ	ハヤキ	ニコキ	ナガキ	トホキ		チカキ	タカキ	シゲキ	サキ	コトナキ	キヨキ	カタキ		アラキ	アサキ	アカキ	シロキ	クロキ	アヲキ		
2			1		1		1	1	1		5	7		2	4			16			1		1	2	1	1	a	
								3		1				2		1		12			1		4	1			b	
			2	1	5	1		1	4		27	15	3	1	16		2	30	1		5	1		1	1		c	
1											1	4		4				16			2		16	3			d	
3			3	1	6	1	1	5	5	1	33	26		7	5	20	1	2	74	1		9	1	21	7	1	2	計

感情		評価		感 覚							
			ヨ	*ヤス(安)	サム	*カラ	ウマ	イタ	アマ		
			1	4			3	2		a	語幹による修飾
										b	
					3	1	2	13		c	
							10		10	d	
										計	
			1	7	1	12	16	2	10		
*ヤスキ	*カラキ	*イタキ	ヨキ	サムキ				*イタキ	アマキ		
			1	3				1		a	連体形による修飾
										b	
1	1	5	6	15						c	
			5					1		d	
1	3	5	12	18				1	1	計	

おり、その点においては情意性形容詞に連続することが留意される。キヨキも、次のような例ではアカキと同様に「汚れがなく潔白である」意となる。

(11) ……継ぎて来る君の御代御代隠さはぬ明き心を皇辺に極め尽くして(略) 見る人の語り次てて聞く人の鑑にせむをあたらしき清きその名そ(吉用伎曾乃名曾) おぼろかに心思ひて空言も祖の名絶つな…

(万葉集二〇・四四六五)

トホシ・ナガシは、空間的な距離や長さをいう場合と時間的な距離や長さをいう場合とがある。時間的な距離や長さにおいては言うまでもなく、空間的な距離や長さにおいても、印象としての距離や長さとは必ずしも一致しないことは多い。一日が千年にも思われたり、恋しくても会えない相手のことが実際の距離以上に遠く離れているように感じられたりすることはあるものである。ま

た人によって距離や長さの感じ方が異なることもあるう。

このようにトホシ・ナガシは主観的判断が加わりやすい。この主観的判断は情意性形容詞の特徴でもあって、トホシ・ナガシは情意性形容詞に連続する面がある。この点、先に示したアカキ・キヨシと同様である。従って、状態性形容詞は語幹による連体修飾が中心であるが、情意性形容詞に連続する面がある場合は連体形による修飾も多く見られるといえる。

シゲシは知覚の対象(主語)にあたる名詞を示して「[名詞＋(助詞/助動詞)＋連体形]＋名詞」の形態をとることが多い(二〇例中一七例)。シゲシが「頻繁である」意で用いられる場合に、何が頻繁であるのかを示す必要があったようである。ここでシゲシの知覚の対象に注目すると、例13「人言」のほか「草根」「小筑波」など複合語であるものが多く、複合語ではないものは例12の他一例しかない。また例13、14のように、知覚の対象には、主格の格助詞が接しているものや名詞句となるものもあることが注目される。

(12) 言繁き(事繁) 里に住まらずは今朝鳴きし雁にたぐひて行かましものを (万葉集八・二五二五)

(13) 人言の繁き間守りて(繁間守而) 逢ふともやなほ我が上に言の繁けむ (万葉集一一・二五六二)

(14) 君により我が名はすでに竜田山絶えたる恋の繁きころかも(之気吉許呂可母) (万葉集一七・三九三二)

ところで、「[名詞＋連体形]＋名詞」と同様の意味を表す形態

として、今回調査対象からはずした「[名詞+語幹]+名詞」がある。ネジロタカガヤ〈祢自路多可我夜〉(万葉集一四・三四九七)、クサブカユリ〈草深由利〉(万葉集七・二二五七)、ハビロユツマツバキ〈波毘呂由都麻都婆岐〉(古事記歌謡五七)などの他、コトナグシ(前掲)・ミナセガハ〈水無瀬川〉(万葉集一一・二八一七)のような「[名詞+ナ(無)]+名詞」の例がある。これらの例で知覚の対象となる名詞は、傍線で示したようにいずれも複合語ではなく助詞や助動詞を伴う例もない。「[名詞+語幹]+名詞」という複合名詞では、知覚の対象が複合語や名詞句であることは避けられたようである。これは二・一で述べた、修飾部が長くなりすぎないようにする傾向と同様のものであろうし、修飾部には句は用いられないということでもある。このためシゲキは連体形で用いられることが多かったと思われる。

サムシは、連体修飾用法となる場合「寒さの原因+サムシ+場所・時間」という形になることが多い(一八例中一七例)。

(15) 秋風の寒き朝明を〈寒朝開乎〉佐農の岡越ゆらむ君に衣貸さましを (万葉集三・三六二)

(16) 衣手に山おろし吹きて寒き夜を〈寒夜乎〉君来まさずはひとりかも寝む (万葉集一二・三二八二)

(17) 琴酒を押垂小野ゆ出づる水ぬるくは出でず寒水の〈寒水之〉心もけやに思はゆる… (万葉集一六・三八七五)

「寒さの原因」は、例15は「秋風」、例16では「山おろし吹き」が相当する。この「寒さの原因」は例15で「秋風が寒い」と

言えるように知覚の対象である。ところがサムシでは「場所・時間」も知覚の対象である。例15は「朝明」が「時間」であるが、「夜明けが寒い」とも言える。すなわち、サムシは「[原因]が寒い」「寒い[場所・時間]」というように、二つの知覚の対象を持ち、二重の意味のまとまりを構成している。これはサムシが感覚形容詞であることと関連していると見られるが、このような場合一方の知覚の対象のみと結びつく、すなわち「寒さの原因+「サム+場所・時間」」のような形態は避けられたのであろう。なお、語幹による連体修飾は例17のみである。「水」を修飾しており、「寒い」意ではなく「冷たい」意であって、知覚の対象も一つである。

三・二・二 情意性語幹

情意性のク活は連体形による修飾が中心である。このことは、前節で見た傾向、すなわち状態性形容詞は語幹の連体修飾用法をとるが、情意性形容詞に連続する面がある場合は連体形による連体修飾用法を用いるという傾向に沿うものである。

この傾向に反するものはヨシで、情意性形容詞でありながら語幹による連体修飾用法の例がある。

(18) 新たしき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事〈伊夜之家余其騰〉 (万葉集二〇・四五一六)

ヨゴトは、特定の事柄に対して作者が評価するというものではない。「新年の大雪は豊年の瑞兆」(新編日本古典文学全集頭注)

であつて、豊作は人々が一般的に望むことである。ヨシは評価形容詞に分類しているが、ヨゴトが個人にとどまらず人々に共通する評価となる、つまりなにがしかの客観性を持つ点では、状態性形容詞と連続する面がある。そのため語幹による修飾の例となり得たのであろう。これは、意味の上で情意性形容詞に連続するク活は連体形による修飾用法が多いことの裏返し現象である。

三・三 ク活語幹による修飾とク活連体形による修飾

ク活の連体修飾用法のあり方を整理すると、状態性形容詞では語幹による修飾用法が、情意性形容詞では連体形による修飾用法が中心である。カラシ・イタシは同一語の中でその傾向が端的に表れる。これらは語幹の連体修飾用法においては感覚を表すが、連体形の連体修飾用法においては感情を表す。カラキが修飾するのは、上代ではすべて「恋」であり、イタキは六例中五例が心情について言う例となっている。

(19) …事もなく喪なくあらむを世の中の憂けく辛けくいとのきて痛き傷には辛塩を〈鹹塩遠〉注くちふがごとくますます重き馬荷に…
(万葉集五・八九七)

(20) いざ吾君振熊が痛手負はずは〈伊多呂淤波受波〉鳩鳥の淡海の海に潜させなわ
(古事記歌謡三八)

(21) 志賀の海人の一日も落ちず焼く塩の辛き恋をも〈可良伎孤悲乎母〉我はするかも
(万葉集一五・三六五)

(22) 世の中し常かくのみとかつ知れど痛き心は〈痛情者〉忍び

かねつとも

(万葉集三・四七二)

それでは、連体修飾用法における意味と形態との対応、すなわち状態性—語幹、情意性—連体形という対応はなぜ存在するのだろうか。その理由には共通概念化の可否が関わっていると思われる。次の例を参照されたい。

(23) 彼の「黒髪／白髪／茶髪／＊青髪」が帽子の下から見えた。

(24) 彼の「黒い髪／白い髪／茶色い髪／青い髪」が帽子の下から見えた。

一般に人間に青い髪は存在しないので、「髪」に対して「青」という属性は結びつかず、「青い髪」という概念はない。また「青髪」という表現もない。もし髪を青く染めた人間がいたとしても、「青い髪」という概念が人々に定着しない間は「青髪」とは言わないだろう。しかし、仮に人々の間に髪を青く染めることが流行し、誰もが青い髪を見えるというような状況になったならば、「青い髪」という概念が定着し「青髪」という語も誕生するかもしれない。現在口語で用いられる「茶髪」も、茶色い髪の人をよく目にするようになった時点で生まれた語であろう。

これに対して「彼の青い髪が帽子の下から見えた」という表現は、その人間の髪の色をありのままに叙述するものである。たとえ「青い髪」が人々の共通概念でなくとも、その人物の描写として可能である。それは「青い」と「髪」との結びつきが一回性のものであり、「青い髪」という普遍的な概念を示すわけではないからである。つまり、語はその概念が人々の間に共有されるも

のであるが、句はそれが人々に共有される必要はなく、言語使用者独自の表現でもよいということである。

ここで形容詞の意味に目を向けると、状態性形容詞では知覚の対象はモノであり、「語幹＋名詞」は具体的なモノとその属性を表す。知覚の対象もその属性も誰もが共有できるので、モノと属性との結びつきは客観的で、誰もが共通概念として持つことが可能である。一方、情意性形容詞では知覚の対象はコトガラであり、コトガラに対する評価や感情といった知覚は話者の主観に基づくものであるから、コトガラと知覚の結びつきを誰もが共通概念として持つことは難しい。

このように見えてくると、連体修飾用法において語幹が用いられ複合語となるか、連体形が用いられ名詞句となるかは、共通概念化が可能であるか否かによると言えるだろう。状態性形容詞は意味が客観的で共通概念化されやすいので、語幹による連体修飾用法が多く用いられる傾向があったが、情意性形容詞は意味が主観的であるため共通概念化が難しく、共通概念とは関係なく使える連体形による修飾を選択する傾向があったと思われる。

ところで、二・一で挙げた音節数という基準とこの共通概念化の可否という基準との優先順位であるが、情意性ク活は二音節語幹でも連体形による連体修飾用法の例が中心であることを考えると、共通概念化の可否の方が優先順位としては高いと思われる。

四 上代におけるシク活用形容詞の連体修飾用法

四・一 音節数との関わり

上代におけるシク活用形容詞（以下、シク活）の連体修飾用法を表4に示す。ク活では語幹による連体修飾用法において基本的に二音節以内の語幹が用いられたが、シク活ではそのような制限は見られず、複合語幹による連体修飾用法も見られる。

シク活は語幹にシを含み二音節語幹のシク活自体が少ないこともあり、二音節以内という制限がないのは当然と言える。また、複合語幹や三音節以上の語幹による修飾が可能であることには、語幹末のシの存在が関わっていると思われる。「語幹＋名詞」という複合語におけるク活とシク活との最も端的な相違は、シの有無である。形容詞は「シ」が言い切りの形態であるから、語尾が続かない限り形容詞はシで一旦切れるという意識が言語使用者には常にあるはずである。従って、このシの存在によりシク活の「語幹＋名詞」は常に分節の可能性を内包することになる。そのため語幹と名詞との結びつきはク活ほど緊密ではなく、語幹が修飾部であるのかそれとも独立した語であるのか、曖昧さを孕む。つまり、「ク活語幹＋名詞」が緊密に結びついた複合語であるのに対して、「シク活語幹＋名詞」は結びつきが弱く、結果として複合語でありながらも名詞句的性格をも併せ持っているのではないか。とすれば、「シク活語幹＋名詞」において語幹の音節数に制限はないはずである。

【表4】

評 価										感 覚	状 態															
クシ	カナシ (愛)	カグハシ	ウルハシ	ウラグハシ	ウツクシ	イログハシ									トモシ				オヤジ	オナジ	ウツシ				アタシ	
3	4	3			1	2													2	2	5					a
																										b
			3		2	1	1								1						4	3			1	c
																			7	1	1					d
3	4	3	3	3	3	1									1				9	7	9			1	計	
	カナシ (愛)	カダマシキ	カグハシキ	ウラメシキ	ウツクシキ	イヤシキ	アヤシキ	アタラシキ	アシキ	スズシキ	*メヅラシキ	*ムナシキ	マツシキ	ヒサシキ	*トモシキ	シケンシキ	サガシキ	コゴシキ	オナジキ	ウツシキ	イツクシキ	イソシキ	アラタシキ			
	4	3	1	2	2	3		1					2	1		1	5		1	2	1		1	a		
		1	1			2	1																	b		
	1		2		2	1	2		1	2	1	1	4		1								4	c		
			2				2	11								4		2			1			d		
	5	1	3	5	2	4	3	4	5	12	1	3	1	1	6	1	1	5	5	3	2	1	1	5	計	

感 情					評 価																	
					アリガハシ	ヨロシ			マダハシ	ハナダハシ			ナダナダシ	トトトトシ	サカシ				クハシ			
					1	1			1	1	1			1	1				2		a	
																					b	
										1			1						2		c	
																					d	
					1	1			1	2	1		1	1	1				4		計	
カナシキ (悲)	オモホシキ	オホホシキ	ウレシキ	イタハシキ	ヲシキ	ヨロシキ	*メヅラシキ	*ムナシキ	マカナシキ (愛)	ハシキ	ナツカシキ	ナダハシキ	*トモシキ	サカシキ	コホシキ	コヒシキ	コキダシキ	ケシキ	クハシキ	クスバシキ	クスシキ	
	3	1			3	3	1	3	1	1	5	4	1	2		1	5	2		1	1	
			1	1	2												1					
2					9	5	1	1		1		1	3	3	2		1	1		1		
1														6								
3	3	1	1	1	2	12	8	1	4	2	1	6	4	2	5	9	1	7	1	3	1	2
																					計	

語幹による修飾

連体形による修飾

情 感										語幹による修飾			
ミガホシ										a	b	c	d
										計			
7	ホシキ	タノシキ	クルシキ	サバシキ	キホシキ					a	b	c	d
		6	2	2									
				1									
		6		4		3	1						
	12	2	6	1	3	1				計			

次の例は、この名詞句の性格が現れたものと思われる。

(25) …沖つ波寄せ来る玉藻片縊りに縊に作り妹がため手に巻き
持ちてうらぐはし布勢の海水に〈宇良良波之布勢能美豆宇弥
尔〉海人舟にま梶權買き白たへの袖振り返し率ひて我が漕ぎ行
けば… (万葉集一七・三九三)

(26) 八千矛の神の命は八島国妻娶きかねて速々し高志の国に
〈登々富々斯故志能久邇々〉賢し女を有りと聞かして麗し女を
有りと聞こしてさ呼ばひに有り立たし… (古事記歌謡二)

ウラガハシフセノミズウミヤトホトホシコシノクニは被修飾部に
助詞ノが入ることから、一語と見るかは議論もあるう。しかし
例25は「玉藻を縊にし手に持て」「ウラガハシ美しい」布勢の
海水で梶を取り付け漕いで行くと…という文脈で、ウラガハシ
は「布勢」ではなく「布勢の海水」を修飾していると思われる。
例26は「八千矛神の命は八島国のうちでは妻を求めかねていたが、
「トホトホシ」遠い遠い」越の国に賢い女がいるとお聞きになっ

て、(略)求婚にお出かけになり…」という文脈である。トホト
ホシも「高志」ではなく「高志の国」を修飾していると見てよい
であろう。名詞句であればこのような形態は問題がないのであつ
て、これらの例は複合語である「シク活語幹+名詞」の名詞句的
性格によって可能となったものであろう。

その一方で、例25、28のような五音節語幹のシク活は連体形に
よる修飾の例が見られない。これは調査対象において韻文の占め
る割合が高いことと関係するだろう。すなわち、五音節語幹形容
詞の連体形は六音節となり、音数律との関わりから用いられにく
かったと考えられる。

(27) あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を〈長永夜乎〉
一人かも寝む (万葉集一一・二一八〇二或本歌)

(28) 花ぐはし〈波那具波辞〉桜の愛でこと愛では早くは愛でず
我が愛づる子ら (日本書紀歌謡六七)

四・二 語幹の意味との関わり

シク活では、語幹による修飾が情意性シク活にも比較的多く見
られる。表5は情意性シク活で語幹による連体修飾用法を持つも
のとその修飾名詞の一覧である。修飾名詞の後の数字は延べ用例
数で、数字がないものはすべて一例である。

このうち、五音節語幹のシク活(表5a)は前節で見た音数律の
問題が関わっていると見られる。表5bのミガホシは「見+ガ+
ホシ」でガは格助詞である。ホシはこの他にアリガホシ、ミホシ、

【表5】

b		a					
ウツクシ	カナシ	ウルハシ	アリガホシ	ナガナガシ	トホトホシ	ハナグハシ	イログハシ
妹2、母	妹4	夫2、妻	住み良き里	夜	高志の国	桜、葦垣	子
b							
		ミガホシ	マグハシ	クハシ	カグハシ	クシ	ハシ
		もの、御面	君2、国2、山、	児ろ	花橋2、君	御魂2	妻

キホシ、「動詞未然形+マクホシ」という形をとることもある。

そのうち、連体形による連体修飾用法となるのは、ガが入らないキホシか「動詞未然形+マクホシ」の場合のみである。「動詞未然形+マクホシ」は例えばミマクノホシキキミのようにノが挿入された形態をとることもある。また形容詞連体形が連体修飾用法となる例で知覚の対象を伴う場合は例29のようにノが用いられ、ガが用いられる例は見られない。

(29) 梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき
〔恵能古保志枳〕春
来るらし
(万葉集五・八三四)

これらのことから、ミガホシに連体形による修飾が見られないの

は、このガと関わりがあると思われる。しかしガがどのように関わっているかは明らかではなく、今後の課題としたい。

それ以外の、母や妻、恋人などをいとしく思う気持ち(ウルハシ・カナシ・ウツクシ・ハシ)、貴人に対して立派だと思ふ気持ち(カグハシ)、自然を美しいと思ふ気持ち(カグハシ)、女性を賢い、あるいは結婚相手としてふさわしいと思ふ気持ち(サカシ・ヨロシ)、神霊を不思議であると思ふ気持ち(クシ)は、個別の様々な状況を考える限りにおいて主観的なものであるが、その状況を捨象すればある程度一般的な共通概念となり得る。対象となる人物を美しいと思ふ気持ち(クハシ・マグハシ)はやや状況が異なるが、次の例は共通概念化されていたと見られる。

(30) 八千矛の神の命は八島国妻娶きかねて遠々し高志の国に賢し女を有りと聞かして麗し女を〔久波志売遠〕有りと聞こしてさ呼びひに有り立たし：(古事記歌謡二)

クハシ女は二例いずれも女性の評判を聞いて結婚するという場面であり、その美しさは誰もが認めるものであったと見てよい。この例から、クハシ妹・マグハシ児ろの例も、相手を美しいと思ふ気持ちは本来は個人の主観的な評価であるが、その美しさは自分だけでなく誰もが認めるはずだと評価している、と見ることもできようか。

このように、情意性シク活の語幹による連体修飾の用例は、音節数と共通概念化で大部分は説明ができる。従って、情意性形容詞でも共通概念化できる場合は語幹による連体修飾用法も可能と

いう点ではク活と同様である。

ここで確認しておきたいことは、形容詞の意味は絶対的に固定されたものではなく、状態から情意へ、あるいは情意から状態へ、という連続があることである。そもそも形容詞は対象への知覚や判断を表すという点では全て同様であって、知覚や判断がより客観的なもの（状態）とより主観的なもの（感情）を両極において、その間は緩やかに連続していると見られる。形容詞のそのような連続は、構文上の特徴からも確認することができる。今回、形容詞の意味と連体修飾用法の形態に関してある程度の傾向が見え、それに反する例もまた見えるのは、形容詞の意味がある程度分類されながらある程度他へ連続する面もあることの現れとも言えるだろう。

五 まとめ

形容詞の連体修飾の形態を選択するにあたって、上代では次の二点が基準として考えられる。ク活では（１）が優先されるが、シク活は（２）が優先される。

（１）形容詞の意味……状態性語幹では語幹による修飾、情意性語幹では連体形による修飾が選択される傾向がある。状態性語幹でも情意性と連続する面がある場合は連体形による修飾が選択されることがあり、情意性語幹でも状態性と連続する面がある場合は語幹による修飾が選択されることがある。

（２）語幹の音節数……ク活では二音節語幹の場合は語幹による

修飾が、三音節以上の複合語幹等の場合は連体形による修飾が選択される傾向がある。シク活では音数律の問題から五音節語幹の場合は語幹による修飾が選択される。

音数律の問題はシク活のみ言及したが、当然ク活においても連体修飾の形態の選択に影響を及ぼしていると思われる。今回示した基準は絶対的なものではなく、そこに音数律の問題が影響している可能性は高い。ただ音数律の問題を勘案したとしても、意味と連体修飾の形態との対応は意味を持つものと思う。

注

（１）古事記・日本書紀は歌謡（至寿含む）、日本書紀訓注、古事記訓注・以音注のみを対象とする。日本書紀訓注では、本文中で活用して用いられていても訓注では終止形になっている場合があるので、連体形になっているもののみを例として採用した。

（２）評価形容詞に分類した「愛しい」は意味の上からは感情に分類すべきかとも思われる。構文的には、主語がモノにもなり得るので評価に分類したが、「私」が主語に立つことが可能である点では感情に連続する。「悪い」のような評価形容詞と「うれしい」のような感情形容詞との中間に位置づけられると言える。更に別の分類を立てるべきかとも思うが、現段階では「評価」としてまとめておく。

（３）例外となるキタナシは程度の甚だしさを表す「ナシ」の複合語かとも思われるが、明らかではない。シコメシは山口佳紀（一九八五）では「シコ（醜）＋マナシ」と分析し、マは「情感言を作る接尾辞」とみている。それに従えばこれも派生語幹となる。また、中古になると語末に「ケシ」の形をとる形容詞は「イササケ

業」(土左日記一月四日)「アハツケ人」(源氏物語・夕霧)のよう
に名詞を修飾する例が見られる。

- (4) アカ・アラ・クロは名詞の被覆形と同形であるので、そのことも
用例の多さに繋がっている可能性はある。実際は形容詞の語幹
であるのか名詞の被覆形であるのかの判断は困難である。どちら
の性格をも含む語構成要素であったと見るべきか。

- (5) この考えを推し進めると、全ての状態性形容詞に情意性が見ら
れ、連体形による連体修飾用法が多く見られるのではないかと、と
いう考え方にもなるだろう。しかし、情意性の持ちやすさについ
ての程度差はあると思われる、その程度差がこの連体形による連体
修飾用法の用例数に現れているのではないかと考える。

- (6) この点については前田富祺(二〇〇二)に示唆に富む指摘があ
る。「青猫」という語は詩語という位相では語であるとしても社
会一般に通用する語とは認められないこと、「青猫」が一般に用
いられなかった理由として、詩人の「青」に対する特別のこだわ
りがあったことが述べられている。本稿の観点でいえば、その特
別なこだわりが共通概念化されなかったため、一般に通用する語
として残らなかったということになろう。

- (7) これについてはシク活の終止形と語幹の用法とどちらが先に成
立したかという問題がある。川端善明(一九七九)では、連体の
装定関係を分節統合する係助詞シ(ハシキヤシ妹)などのシと
と複合語に見られるシとを関連づけ、複合語に見られるシは複合
関係を確認的に形式化したものであり、また分節的分化の力点と
もなることを述べ、そこから形容詞述定形の成立を見ている。こ
の問題について本稿では触れないが、いずれが先であっててもシが
分節の力点になる点は同様であることに留意しておきたい。

- (8) ハナグハシは枕詞と解されることが多いようだが、「ハナナク
ハシ」という語構成からは形容詞と言えるので、ここは語幹の用

法として挙げた。

【使用テキスト】

万葉集・古事記・日本書紀：新編日本古典文学全集『万葉集』、『古事
記』、『日本書紀』(小学館)／続日本紀宣命：北川和秀編『続日本紀宣
命稿本・総索引』(吉川弘文館)／延喜式祝詞：沖森卓也編『東京国立
延喜式祝詞総索引』(汲古書院)

【参考文献】

川端善明(一九七六)「用言」『岩波講座日本語6 文法Ⅰ』岩波書店
(一九七九)『活用の研究Ⅱ』大修館書店、本稿では清文堂

出版の増補再版本(一九九七)を参照

——(一九八三)「文の構造と種類——形容詞文——」『日本語
学』第二巻第五号 明治書院

阪倉篤義(一九八五)「歌ことばの一面」『文学・語学』一〇五

坪井美樹(二〇〇二)『日本語活用体系の変遷』笠間書院

蜂矢真郷(一九九二)「多少と大小」『記紀萬葉論叢』塙書房

前田富祺(二〇〇二)「語から語彙へ——言語文化史の観点から——」
『国語学』二〇八

山口佳紀(一九八五)『古代日本語文法の成立の研究』有精堂出版

——(二〇〇二)「語形変化に関する一問題——アラタシ(新)
からアタラシ(新)へ——」『日本語史研究の課題』武蔵野

書院

—筑紫女学園大学非常勤講師—